

スパイラログで考える

経済のグローバル化

「自国中心主義の先へ」

経済のグローバル化について、スパイラログを使って将来像を話し合います。

スパイラログ (Spiralog) は、らせん (Spiral) + 会話 (Dialogue) の合成語。単純な円運動ではなく、らせん状に「上昇」していく話し合いであり、同じ話題に戻っても、より高い次元で議論が深まっていくように設計されています。

スパイラログでは、

REALIST (現実主義者)

ANALYST (分析家)

CREATOR (創造者)

という三つの相互補完的な視点から議論します。

- まず、それぞれが意見を表明する「一次立論」を行ないます。
- 次に、異なる視点間で「循環質問」を行ないます。
- そして、質疑応答で得られた気づきをもとに「二次立論」を行ないます。
- 最後に、これらの議論を通じて得られた知見を統合し「第4の解決策」を共創します。

●スパイラログ基本モデル

第1ステップ：視点設定

- ・以下3種類の視点を設定してグループ分けする
 - REALIST (R) : 実現性軸
 - ANALYST (A) : 影響範囲軸
 - CREATOR (C) : 価値観軸
- ・3つの視点は「対立軸」ではなく「補完軸」として設定
- ・各グループの視点が「部分的真理」であることを確認

第2ステップ：一次立論：

- ・3つの視点に基づいてR、A、Cそれぞれが意見を発表する

第3ステップ：循環質問：

- ・各グループは他の2グループに対して以下3つの質問する
- ・DEEP Q：相手の視点をより深く理解するための探求質問
- ・INTER Q：自分たちの視点と相手の視点の相互依存関係を探る関係性発見の質問
- ・PIVOT Q：各視点が依拠している前提条件（スパイラルの回転軸）を明らかにする質問

1.DEEP Q

1-1: R to A、1-2: R to C、1-3: A to C、1-4: A to R、1-5: C to R、1-6: C to A

2.INTER Q

2-1: R to A、2-2: R to C、2-3: A to C、2-4: A to R、2-5: C to R、2-6: C to A

3.PIVOT Q

3-1: R to A、3-2: R to C、3-3: A to C、3-4: A to R、3-5: C to R、3-6: C to A

※それぞれQの後に回答タイムを設けるので全部で18回の質疑応答が行なわれる。

第4ステップ：二次立論

- ・質問で得られた知見を参考に、3つの視点を統合し再構築した新しい枠組みを提示する。
- ・各グループが「自分の視点を保ちながら、他の視点も活かす方法」を提案。
- ・単なる妥協ではなく、ひとつ上のレベルからメタな視点を確保する。

第5ステップ：協働創発立論

- ・3つのグループが協働して「第4の解決策」を創出する。
- ・誰も最初には考えていなかった道を探す。
- ・Win-Win-Winを超えた「創発的価値」を発見する。
- ・正解を探すのではなく、より良い理解を共に創る。
- ・部分最適ではなく全体最適を目指す。

「経済のグローバル化」という複雑な課題について、提供された資料に基づき「スパイラログ（文殊縁話）」モデルを用いたシミュレーションを行います。

第1ステップ：視点設定

以下の3つの視点グループを構成します。これら是对立するのではなく、互いの死角を補い合う「補完軸」として機能します。

1. REALIST (R) - 実現性軸:

国家安全保障やサプライチェーンの強靱化、具体的な政策コストを重視する。

2. ANALYST (A) - 影響範囲軸:

経済効率、格差の拡大、市場の相互依存関係など、広範な影響を分析する。

3. CREATOR (C) - 価値観軸:

労働基準、環境、人権、そして「どのような社会を望むか」という理念を重視する。

第2ステップ：一次立論

● Rの主張:

自由貿易の恩恵は認めつつも、半導体やエネルギーなどの戦略的分野では自国中心主義的な保護が必要である。現実的な「フレンドショアリング」により、安全保障上の脆弱性を抑えるべきだ。

● Aの主張:

グローバル化は全体的な生産効率を高め新興国の貧困を削減したが、先進国内の格差拡大や金融危機の伝播といった負の影響も大きい。これらをデータに基づき最適化する必要がある。

● Cの主張:

単なる経済成長ではなく、環境や労働基準の「底辺への競争」を防ぐ価値観が必要だ。多様な文化が尊重され、誰もが恩恵を享受できるグローバル化を目指すべきである。

第3ステップ：循環質問（18の質疑応答）

1. DEEP Q（探求）

- **1-1 (R to A):** 「経済効率を追求する際、サプライチェーンの脆弱性が露呈した時のコストをどう計算に入れていますか？」
 - **回答(A):** 従来のモデルでは低かったですが、現在はリスク分散のコストを「保険」として組み込む必要があります。
- **1-2 (R to C):** 「理想的な労働基準を導入することで、本国産業の国際競争力が失われる現実をどう捉えていますか？」
 - **回答(C):** 短期的にはコスト増ですが、長期的には持続可能なブランド価値となり、消費者の支持を得られると考えます。
- **1-3 (A to C):** 「価値観を優先することで、低所得層が安価な商品にアクセスできなくなるリスクをどう考えますか？」
 - **回答(C):** 安さの裏にある「犠牲」を透明化し、適正価格で循環する仕組みを創るべきです。
- **1-4 (A to R):** 「戦略的産業の保護は、結果的に非効率な産業を温存し、全体の成長を停滞させませんか？」
 - **回答(R):** そのリスクはありますが、国家の存立に関わる分野では「効率」より「存続」が優先されます。

- **1-5 (C to R):** 「安全保障を理由とした同盟国間での囲い込みは、世界的な分断を加速させませんか？」
 - **回答(R):** 加速させる懸念はありますが、現状の地政学的リスクへの対応として不可避な選択です。

- **1-6 (C to A):** 「経済成長率以外の指標で、グローバル化の成功を測ることは可能ですか？」
 - **回答(A):** 可能です。幸福度や環境負荷、格差のジニ係数などを統合した新しい指標が求められています。

2. INTER Q（関係性発見）

- **2-1 (R to A):** 「Rが進める『フレンドショアリング』は、Aが分析する世界経済の安定に寄与しますか？」
 - **回答(A):** 特定の圏内では安定しますが、圏外との断絶が新たな市場の不安定要因になります。

- **2-2 (R to C):** 「Rが守ろうとする『国内雇用』は、Cが重視する『働く者の尊厳』とどう繋がりますか？」
 - **回答(C):** 地場産業の育成は、地域コミュニティの文化と誇りを守ることに直結します。

- **2-3 (A to C):** 「Aが指摘する『租税回避』の問題を解決することは、Cの目指す公正な社会の基盤になりますか？」
 - **回答(C):** はい。適正な納税は、公共の福祉（価値）を実現するための不可欠な手段です。

- **2-4 (A to R):** 「Aが分析する『物価上昇』は、Rが進める関税政策の維持を困難にしませんか？」
 - **回答(R):** 困難にします。そのため、国民への説明と、他のコスト削減策との組み合わせが必要です。

- **2-5 (C to R):** 「Cの掲げる『環境基準』を国際条約にすることは、Rにとっての『交渉力』を高める武器になりますか？」
 - **回答(R):** はい。高い基準を標準化できれば、他国に対する技術的・道徳的な優位性になります。

- **2-6 (C to A):** 「Cが重視する『文化の伝播』は、Aが考える『市場のイノベーション』を促進しますか？」
 - **回答(A):** 異文化の融合は新しいアイデアの源泉であり、長期的な経済成長の原動力になります。

3. PIVOT Q (前提条件の確認)

- **3-1 (R to A):** 「Aは、世界市場が今後も『拡大し続ける』という前提に立っていますか？」
 - **回答(A):** いいえ。人口減少や資源の制約から、量的拡大より質的充実に軸足が移ると予測しています。

- **3-2 (R to C):** 「Cは、すべての国が同じ価値観（民主主義や人権）を共有できるという前提ですか？」
 - **回答(C):** 普遍性は追求しますが、対話を通じて「共存可能な最低限のルール」を見出すことが出発点です。

- **3-3 (A to C):** 「Cは、『消費者は常に倫理的な選択をする』という前提で考えていますか？」
 - **回答(C):** 制度や情報公開によって、消費者が「賢い選択」をしやすくなる環境を整えることが前提です。

- **3-4 (A to R):** 「Rは、『経済的な依存関係』よりも『政治的な対立』が常に優先されると考えていますか？」
 - **回答(R):** 常にではありませんが、危機の際（コロナや紛争）には政治が経済を規定する現実を前提としています。

- **3-5 (C to R):** 「Rのいう『自国』の定義は、境界線のはっきりした国民国家に限定されていますか？」
 - **回答(R):** 現状はそうですが、「志を共にする国々（フレンド）」へと拡張されつつあります。

- **3-6 (C to A):** 「Aは、経済活動の究極の目的を『効率化』であると定義していますか？」
 - **回答(A):** 従来はそうでしたが、現在は「レジリエンス（回復力）」や「持続可能性」も目的関数に含まれています。 ,

第4ステップ：二次立論

メタ視点による再構築：

この対話を通じて、3つの視点が必要だった理由は「持続可能なレジリエンス」を定義するためだと気づきました。効率（A）だけでは崩壊し、安全保障（R）だけでは停滞し、理念（C）だけでは空想に終わります。

- **Rの再提案:**

安全保障を「自国のみ」ではなく、Cの価値観を共有する諸国との「価値観同盟」に基づく供給網として再構築する。

- **Aの再提案:**

格差や環境負荷を「外部不経済」として排除せず、デジタル技術で可視化し、市場メカニズム（A）の中にRの安全保障とCの倫理を取り込む。

- **Cの再提案:**

抽象的な理念ではなく、Rが実現可能な政策パッケージとして、かつAが持続可能性を証明できる形で「公正な貿易基準」を提示する。

第5ステップ：協働創発立論（第4の解決策）

「共鳴するローカル、繋がるグローバル（Resonant Globalization）」

これは、単なる「グローバル化 vs 自国中心主義」の折衷案ではありません。

- **創発的価値:**

戦略的分野を自国（または同盟国）に戻す「回帰」を、単なる保護主義ではなく、「地域コミュニティの再生と環境負荷低減（C）」を同時に達成するイノベーションの機会に変えます。

- **具体的解決策:**

1. **価値観ベースの選択的再接続:** 同盟国間での供給網再編（フレンドショアリング）を、高い労働・環境基準を満たす国々との「プレミアム市場」へと昇華させる。
2. **デジタル・トレーサビリティ:** 商品がどのような環境・労働条件で、どの国の安全保障リスクを経て届いたかを可視化し、効率と倫理を両立させる。
3. **脆弱性の資産化:** サプライチェーンの多重化を「無駄」ではなく、危機の際にも経済を止めない「社会インフラ」と定義し直し、官民で投資する。

【今日の対話で最も驚いた発見】

「自国中心主義的な動き（R）は、実はグローバルな価値観（C）を純化させ、新しい形の質の高い経済圏（A）を生み出すための『フィルター』になり得る」という発見がありました。分断は終わりではなく、より洗練された統合へのプロセスであるという理解に至りました。